

交流を通じて、心の病気を身近な問題として感じる

大阪府立松原高等学校

1. はじめに

(1) 学校の概要

本校は、創設以来、人権教育に力を注いでおり多くの成果をあげてきた。その根幹にあるのは、「すべての生徒が生き生きと活動できる学校づくり」を目指すという教育目標である。障がい者問題についての学習も、その一環として重要な位置を占めてきた。その学習を通じて得た「違いを認め合える」という力は、生徒たちの人間的な幅の広さを形成してきた。

平成3年からは、本格的な授業改革に着手し、平成5年「自由選択講座」の創設により、生徒や地域のニーズにこたえる柔軟な教育内容の編成に力を注ぎ、平成8年には総合学科へ移行した。総合学科の系列の中では、「地域福祉系列」を設け、体験型・参加型の教育内容を研究し、実践を重ねている。

(2) 取り組むことに至った経緯

本校に隣接して精神科の病院があり、生徒や職員は、病院の患者さんが近隣を行き来される姿を目にしていた。しかし、精神面の病気や障がいについて、あまり深く考えてこなかった。このようなことから、精神面の病気や障がいを「心の病気」として、地域と連携して学習する必要性を強く感じた。また、そのことを通して、人権意識や福祉マインドに基づく障がい者理解教育をより豊かにしたいとも考えた。

平成6年1月に、病院を訪問し、見学を依頼した。病院の対応は、「病院建設当初から、近隣の人や建設に反対してきた人の理解を得るため、頭を下げてまわった。自分のほうから理解したいと病院に来たのは、あなたが初めてだ。」とおっしゃり、「なにか皆の理解を深めていける取り組みができればいいですね。」「協力できることは病院を挙げてやります。」という話になっていった。

そこで、自由選択の授業の中で、このテーマを取り上げることにし、平成6年度に、福祉現場での交流を主体とする「ソーシャルケアセミナー（社会福祉基礎）」（2単位）を開講した。そして、この講座の後半で、7回14時間をかけて教えている。

(3) 目的

「心の病気」について、私たちがもっている、先入観に気づき、事前学習や交流を通じて、正しい理解を得ることを目標としている。

以下は、「ソーシャルケアセミナー」での生徒向けの導入の文章である。

ねらい

「精神障がい者」が福祉の対象として、援助を受けられるよう法律で定められたのは、平成7年のことです。精神障がいについて、皆さんは、どういった病気になにが大変か知っていますか。精神障がい者は、精神障がいによる妄想・幻聴や強い不安感など病気による苦しさがあります。しかし、精神障がい者が正しく理解されていないため、当事者は病気の苦しみよりも、偏見による苦しみのほうがもっと辛いのです。

精神障がいについては、情報が少なく、正しい理解が伝わらない一方、精神障がいのある人が事件をおこした時に、誤った理解や偏見が広まることがあります。多くの方が、精神障がいのことを知る機会がないというのが、一番の問題であると思います。「なぜ、精神障がいの人への偏見がおこるのでしょうか?」「どれだけの方が、実際に交流があってそう思っているのでしょうか?」自分自身にも問い直して欲しいと思います。

今回の授業では、精神障がいを「心の病気」として捉え、「心の病気に向き合っている人たち」のお話を聞き、交流などを通して、「心の病気」の問題をすこしでも身近な問題として捉えるきっかけにできればよいのではと思っています。

2. 取り組みの内容

(1) 選択授業「ソーシャルケアセミナー」の取り組み

(1回2時間で7回、計14時間のプログラム)

- | | | |
|------------|--|------------|
| 1回目 < 学校 > | 「心の病気と精神障がい者について」
統合失調症・うつ病ってどんなもの
ビデオ「家族のための統合失調症講座」 | 資料1
資料2 |
| 2回目 < 学校 > | うつ病と不安障がいについて
UTU-NET(うつ・不安啓発委員会公式ホームページ)を活用
精神障がい者の作業所の取組みについて
ビデオ「偏見を越えて(25分)」 | |
| 3回目 < 学校 > | 「ストレス」について
心の病の引きがね『ストレス』ってどんなもの?
吉村病院、やまびこの家訪問に向け目標設定
こんなところを見てみたい、知りたい、聞いてみたい | |
| 4回目 < 訪問 > | 精神科の病院・デイケアセンターの訪問
デイケアセンター見学・交流(1時間20分)
カラオケ・卓球・リズム体操などの日常のプログラムに、一緒に参加させてもらう。
ミーティング(20分)
・感想、疑問、気付いたことを出し合う。
・病院側の方に質問 | |

- 5回目〈訪問〉 精神障がい者の作業所の訪問
 作業所見学・交流(1時間20分)
 一緒にグループ対抗のゲームの後フリータイム。
 ミーティング(20分)
 ・感想、疑問、気付いたことを出し合う
 ・作業所の方々に質問
- 6回目〈学校〉 施設の利用者や職員の方々を招いての座談会
 施設利用者の体験談
 交流しての感想・疑問について意見を交わす。 資料3
- 7回目〈学校〉 まとめ
 精神医療を取り巻く歴史と現状
 精神障がい者の現状と課題

(2) 授業以外での交流

授業での交流が始まり、定着していく中で、それ以外の交流も進んでいった。

教職員に向けての取組み

職員研修に、病院から医師の方に来ていただいて、統合失調症や「心の病気」について話していただいたり、教員の希望者で病院の見学と研修の機会を持つことができた。

学校行事への患者・利用者の方々の自然な参加の広がり

学校の行事について病院・作業所内にポスターなどを貼ってもらい、患者や利用者の方々に情報を提供してきた。その結果、大勢の方々が、学校行事に来校されるようになり、文化祭の模擬店に出展したり、中庭のコンサートでバンドによる演奏も披露していただいた。

ボランティア活動での出会い

地域の行事やボランティア活動で、利用者の方と生徒たちの出会いがある。出会いを通じて、互いに励まされたり、喜びを共有する機会が増えている。

3. まとめ

授業では、初めに基本的な病気の理解の講義をおこない、その後ビデオによる学習の後交流活動へと進めていく。最初にすべてを教師が語るのではなく、生徒の交流前と交流後の認識の変化を中心に、偏見も含めた様々な課題を整理していく授業展開をとっている。

この講座の生徒は、前期で高齢者問題、後期で障がい者問題を学習している。学習前には、近くに精神科の病院がありながら「心の病気」について、あまり理解していなかった生徒が、交流を終えた後には「いろいろな病気について勉強してきたけど、自分たちに関わりが少ないと思っていた心の病気が、今の私たち高校生に一番身近に思えた」という生徒の感想が多い。多感な青年期には、自分の将来や人間関係等での悩みや挫折を持っている。通所者や作業所の利用者の方々の体験談は、彼らの心情と重なる部分が多く、それらを克服する方法にヒントを示してくれるからだと思う。

本校は、今後とも、地域と連携を深めた福祉教育の充実を図っていききたい。そして、「地域福祉系列」で、「心の病気について理解を深めるための授業」を継続的に取組むとともに、すべての生徒が、地域の障がい者や障がいのある在校生と「共に学び、共に育つ」学校づくりを、推進していききたい。



写真1
クレープを一緒に作って食べている風景



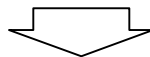
写真2
まちがいさがしゲームを一緒にしている風景

資料1：心の病気についての理解について

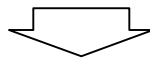
代表的な「統合失調症」についてどんな病気なのかのイメージを持ち、その理解を深めるために、活用した話題と授業展開

映画『ターミネーター』に出てくる1つの場面を紹介しながら「病気によって生じる心の混乱を周りに理解してもらえないときの苦しみ」について説明した。それは、次のような場面である。1人の女性が、「私は未来から来た殺人口ボットに追われている。」と、周りの人に助けを求める。しかし周りの人は「テレビの見過ぎか?」「夢でも見ているのか?」と相手にしない。そこで、女性は、ロボットに1人で立ち向かえねばならなくなる。

統合失調症の人は、この女性の置かれた状況に似ている。それは病気による幻聴と妄想の中で、1人で悩んでいるようなイメージである。



幻聴や妄想は、周りの人には理解してもらえず、孤立した気持ちになる。自分の味方はおらず、悪口をいわれていたり、誰かに追われたりといじめられた感じになって、奇異な行動に出てしまう。



不安や混乱を沈めることに努め、言動を頭から否定せずに、現実との接点を少しずつ、探り当てることが大切である。

資料2：「家族のための統合失調症講座」

全国精神障害者家族会連合会が製作したビデオで、患者にとって一番大切な家族の病気に対する理解を得るために作られたもの。2部構成で「正しい知識は回復への道」「ゆっくり治療し再発を防ごう」それぞれ15分程度で分かりやすい。

第1部「正しい知識は回復への道」では、「100人に1人の割合で発症する」、「遺伝するものではない」などが、示されている。

第2部「ゆっくり治療し再発を防ごう」では、病気の経過についての説明と「急性期は長くない」「この病気は、焦らずに、治療に十分な時間をかけることが重要」などが、示されている

資料3：精神障がいにかかったAさんの体験談の聞き取りと生徒の感想

Aさんの体験談

Aさんは、十代で子どもを産み、子育てについて、経験や知識がなく、1人で悩むことが多かった。たくさんの人からアドバイスを受けたけれども、悩みが解決せず、うつ状態になった。そして、心が深く傷つき、他人に対して疑い深くなり、誰にも相談できず、自分の心の中にため込んでしまった。しかし、精神障害支援センターに通うようになり、同じ悩みを持つ人と接するなかで、自分の悩みを話せるようになってきた。

生徒の感想

お話を聞いて、知ることが、一番大切なことだと思った。話を聞く前では、「よくわからないこと・自分には関係ないこと」と思っていた自分がなさけなかった。

自分も周りの人に常に支えられているのに、一番身近な親を「うとましい」と思ってしまふ。自分には、今なんでも話せる友達はあるのだろうかと考えた。改めて自分を見つめ直そうと思った。自分も、友達に目を向けられるような、支えになれるような人になりたいと思った。

自分のつらかったことや苦労したことを、あんなに一生懸命、話してくれて、すごいと思う。「悩みをひとりで抱え込む」といっておられたけど、私もそれに近いことがよくあると思った。なんでも言える友達を作っていこうと思ったし、家族にもなんでも話せるようになればいいなと思った。そして、私も誰からも相談されるようになりたいと思う。

自分も、いつAさんのような病気が発病するかもしれないとも思う。でも、Aさんのように、病気を治そうという前向きな気持ちがあれば、どんな病気でも立ち向かえるという勇気が持てた。

私も、悩んだりしたとき、友達に相談しても、すべてを打ち明けることができないことがあって、どうしたらいいか分からなくて、何度も泣いたりしたことがあった。けどこらえきれなくて、勇気を持って友達に話したら、なにかつかえていたものが急になくなって自分で前に進むことができた。ひとりで悩んでいるより相談できる人がいることのすばらしさや大切さを、今日のAさんのお話で再認識できた。

私たちがみたいに直接お話を聞いたり、病気の勉強をしていたら、友達から病気のことを相談されたとしても理解できると思う。なにも知らない人は偏見を持ったりしている人も多いから、もっと理解する人が増えれば、病気になった人でも暮らしやすくなるのにと考えた。心の病気の人には、自分がそうだと気づかないと思っていたけど、Aさんは、自分の病気を自覚していて、目の前にあることを認めながらも頑張っているのを見て、すごいなと思った。

岡田尊司 2005 子どもの「心の病」を知る～児童期・青年期とどう向き合うか～

PHP新書

越野好文・志野靖史 2004 好きになる精神医学 講談社

UTU-NET(うつ・不安啓発委員会公式ホームページ) <http://www.utu-net.com>